



俳優

滝藤 賢一 さん

女性として初めての弁護士である三淵嘉子さんをモデルとする NHK 連続テレビ小説『虎に翼』の放送が開始されました。女性に法曹資格が与えられない時代にあって法曹の道を志し、重い扉を開けた主人公に会員の皆様の多くが共感を覚えているのではないのでしょうか。今回、主人公と共に家庭裁判所を立ち上げた判事役を演じられる滝藤賢一さんのインタビューをお届けします。悪役から人権派弁護士まで多種多様な役を演じ分ける滝藤さんの俳優業や家族に対する思いから、弁護士業に対する考え方のヒントをもらった気がしました。

聞き手・構成：富田 寛之、菅原 草子

写真撮影：坂 仁根

—— 今日ではよろしくお願いいたします。今回、滝藤さんが裁判官役（多岐川幸四郎。以下「多岐川」）で『虎に翼』に出演され、司法関係の役どころというところで、お話を伺えればと思います。

お願いします。

—— 滝藤さんは、『幽☆遊☆白書』の戸愚呂兄などインパクトのあるキャラクターの役が多いというイメージがあるのですが。

観て頂いたんですね。ありがとうございます。どうでした？

—— とても面白かったです。戸愚呂兄役は評判ですし、再現度がすごくて感動しました。

ありがとうございます。

—— また、私の息子が『るろうに剣心』のファンで、滝藤さんが一番最初に出てくるシーンで、画面のはるか後方で、建物内の火災の煙の中ではっきり見えないぐらいのところを歩いているんですけども、もうそれを見て滝藤さんで、佐渡島方治だって分かるって言ってたんですよね。

オープニングの志々雄が火の中を歩いているシーンですね。僕は一番後ろにいたと思うんですけど。あれを観て僕だって分かったんですか。シルエットだけだった気がしますけど（笑）。嬉しいです。息子君によろしくお伝えください。

—— これらの作品を見ても、滝藤さんはキャラクターの動きから役作りをされているんだなというのを感じていて。一方、去年、『やさしい猫』というドラマで弁護士役をやられていますが、強烈なキャラクターではなくて弁護士、しかも結構淡々としている役というところで、役作りで考えられたことや参考にされたことはあるのでしょうか。

色々な役をやらせてもらいますが、僕の場合、メイク、衣装、演出、相手役、作品に関わる全ての方の手をかりて、その職業の方にならせてもらっている。相手役の方とセッションして影響を与え合うことの方が重要かと思っています。俺、弁護士になるぜとか、医者だぜとか、そういうのはあんまり意識したことはないです。でも職業病みたいなことはあるかもしれないですね。休日の過ごし方とか、そういうのを考えるのが楽しいです。

——『やさしい猫』の中では、依頼者の妻役、優香さんとの絡みが非常に多く、印象として非常に優しい喋り方だなと感じたのですが、それは共演者との間でドラマの筋に沿ったという形になりますか。

弁護士だから優しく喋ろうというよりは、人として困っている人に寄り添える人であるとか、相手を安心させられる人であるということの方が重要かなと思うんですね。もし自分が弁護を頼むことがあれば、親身になって自分事のように考えてくれる方が、なんでも相談出来るでしょうし、心強い気がするんです。

——『虎に翼』では裁判官役ですけども、家庭裁判所を立ち上げた非常に著名な裁判官役になりますよね。今回、経歴を調べたら、家裁で採用されている制度の多くを、この宇田川潤四郎判事（多岐川役のモチーフ）が創られたんだと分かって非常に感動いたしました。一方で、宇田川さんは凄い変わり者だったみたいな記載もあるんですが、その辺りは今、感じていらっしゃるんですか。

とても変わっていらっしゃったようですね（笑）。それは多岐川という役でもしっかり描かれると思います。スーパー・アイデア・マンだからこそですね。誰も思い付かないようなアイデアをばんばん出して、突っ走る。誰も彼の発想についてこれない。だから変わり者扱いされる。でも、それは子供や女性、立場の弱い方のため。彼の中に揺るぎない信念があったからだと思います。宇田川さんは、演説がうまく、周りにいる人間をその気にさせる天才だったというふうに聞いています。一見、派手な部分が目立ちますが、大事なのは、なぜそういう人間になったかということだと思います。

——宇田川判事は、少年や女性など弱い立場にある方に寄り添って色々な制度を創られた方ですが、弱者や少数者に寄り添う役柄が、滝藤さんは多いのかなということを感じています。俳優は、役を頂く形にはなると思うのですが、弱者や少数者に寄り添う役柄が多いというのは、意識されたことはありますか。

オファーを頂く立場ですので、僕が意識することはないですが、悪い役ばかりやらせてもらってきたので、

不思議な気分です（笑）。（多岐川役と自分とのギャップに）苦しんでおります。僕は多岐川のように、後輩をかわいがったり飲み連れていたり、先頭に立って引っ張っていくタイプじゃないんです。休みの日は一人で黙々と植物の植え替えをしてますから。割と一人でいたい人間なんです。なので今回、役と自分のバランスを取るのが難しくて。

——そうなんですか。

自分の中の多岐川と共通するような可能性を拾って、本来の自分と擦り合せ、無理のないところを狙うんですかね？ それをリハーサルで色々試しながら、ワンシーンワンカット必死になって、やれることを探っているという感じです。俳優という職業をやらせて頂いて、もうすぐ30年ですが、未だによく分かんないです。分かる時が来るんですかね？ 来ないでしょうね（笑）。

——ご自身の中にあるちょっとしたところを引っ張り出してきて、役に乗せるみたいな感じでやられているんですね。

何か一つでも真実でありたいのかもしれない。自分の言葉で喋りたい。自分の感性でリアクションしたい。多岐川だったらというより、自分がやっていることが多岐川でありたいということなのかな。よく分かんなくなっていました（笑）。ただ、こういう理想と野望を持って国を変えていくような人間や職業が、これからの子供達の目標、選択肢のひとつになったら、素敵だなと思います。

——なるほど。今回の朝ドラは、『虎に翼』という題名ですが、この言葉の元々の用法は、「虎に翼を与えてはならない」ですね。女性という男性の既得権益を脅かす、潜在的に強い存在に対して、法律とか仕事とか学問等を与えることへの男性側の抵抗という側面があると思うのですが、逆に、多岐川は、主人公である寅子を上司として引き立てていくポジションにあります。対立構造の中で女性が能力を発揮していくと感じられたところはありますか。

勿論、女性がそういう立場、見られ方をすることを、多岐川は重々承知していると思います。でも何か同じ理想を掲げる、その目的を達成していくためには、

男も女も関係ないですよ。同じ目的に向かっていく同志ということです。劇中にもありますが、多岐川は出る杭が大好きなんです。だから応援したくなるんだと思います。なにせ多岐川自身がかろうじて刺さっている、とんでもなく出ている杭ですから。自分も俳優として、いつまでも出る杭でいるくらいの気持ちと勇気を持ち続けたいです。

—— 一緒に闘っていく同志みたいな感じなのですね。

寅子がいてくれるからこそ多岐川は縦横無尽に駆け回ることが出来るんだと思います。なので右腕どころか、体半分ですよ（笑）。彼女だけに限らず、家庭局5人で一人前。5人でシーンをつくるというのを必ず持って臨むようにしています。巻き込んでいくというか。そうするとより面白くなると思うんですよ。だって芝居はアンサンブルですから。1人でやってたらつまらないです（笑）。美術さんや小道具さんが用意してくださるものも、極力使わせて頂く。使うというより、助けてもらうという意識でしょうか。皆で創っているという気持ちで臨みたいと、常々思っています。

—— では、その俳優という職業ですが、長年続けられている魅力はどこにあると感じていますか。

無名塾に入ったとき、仲代達矢さんが生涯修行だとおっしゃっていました。ひとつひとつの作品と向き合って、役について考え続け現場に臨む。最後の最後まで悪あがきをしています。自分を疑い続けてますよ。満足することがないですよ。劇中で穂高先生が「君もいずれ古くなる」というセリフがあるのですが、自分の芝居への考え方や取り組み方が古くなってるんじゃないかと恐怖を感じているんです。若い頃はそんなこと気にしないで、突っ走ってきたんだと思うんですよ。恐いもの知らずで、オレはオレだ！みたいな。だから、今与えられている状況に甘んじないで、自分のやっていることに疑問を持ち続けないと、この厳しい世界で生き残れないと思います。47歳になって今もおこの多岐川という役を探り、疑いながらやれるというのは、すごく幸せな仕事だなと思っています。



—— 弁護士も正解や終わりが無い仕事と言われますが、そういう苦しさを乗り越える秘訣はありますか。

綺麗事かもしれませんが、苦しめるだけ幸せですよ。健康で元気じゃなければ苦しむことすら出来ないので。僕が今バランスが取れているのは、植物かなあ（笑）。多分無心になれる時間があるということなんだろうね。あと睡眠もとても大事にしています。家の吹き抜けのガラス張りのところにシダレモミジを飾っているんです。ライトアップをしていて、空も見えるんですよ。これを寝る前にストレッチをしながら、ぼーっと見ていて心が穏やかになっていくのを自分と向き合って確認しているんですかね？ たぶんそれでとてもいい睡眠がとれている気がします。寝ているときも仕事のことを考えてしまうって、仕方ないですよ。僕も、今日のリハーサル、うまくかみ合わなかったとか、空回りしちゃったとか感じて、不安で寝られないことがよくあります。台詞が出てこない夢を見るとき、何度も夜中に起きちゃうとか。でも、諦めていますね、もう考えちゃうんだったら考えればいいやって。そう思っていると寝ています。

楽しまなきゃ損だと思うんですね。誰も楽しいことを用意してくれないから、自分で人生を楽しむ。綺麗事っすね（笑）。

—— 弁護士も、試験に受かるまでや、一人前になるまでに時間がかかりますが、滝藤さんが、俳優として諦めないでやっていこうと思えた理由はどのようなところにありますか。

子供の頃から映画が大好きで観まくってました。憧れの世界ですね。オレもいつかこの銀幕の世界で活躍したい！と夢見てましたから。実際は子供の頃に思い描いていた華々しい世界とは違いましたけど（笑）。でも今こうしてたくさんのお仕事を頂けるのは、とても幸せなことだと、日々感じております。

—— 滝藤さんはファッションや植物好きとしても注目を集めていますが、プライベートで大切にされているものはありますか。

家族。今朝も7時に子供達を駅まで送って、戻ってきて玄関掃除して、7時半からBSの『虎に翼』を観てきました。いつもと変わらず生活を送ることが出来ることを幸せに思います。これからも小さな幸せを当たり前と思わず、ひとつひとつ拾っていききたいです。

—— ご家族で演技について話をされることもあるんですか。

そんなのしょっちゅうです。次男、三男、娘と演技合戦が始まりますから。ゲラゲラ笑いながらやります。相手役をやってもらうこともありますし。妻は聞くまではなにも言わないんですけど、なんかピンとこない時に尋ねると「うそっばい。誰のまねしてるの？ 普段のパパじゃない」と的確に言ってくれる。僕以上に僕のことを知ってますから。そうか、これは普通のオレじゃないんだと、妻に気付かされます（笑）。家で台詞を声に出して覚えていると、子供達の方が先に、展開や台詞を覚えちゃう。僕が次の台詞何だっけ、と考えてると、横から台詞を言ってくるんです。ホント面白い家族ですよ（笑）。

—— やっぱ演技しているときが人生の中で楽しい時間なのでしょうか。

そんなわけがないじゃないですか（笑）。でも演技をしていて、いい関係というか、そのシーンの中で俳優同士でいいセッションが生まれ、お互いいい影響を与えて、いいリアクションが取り合えたとき、そこで相手役のいい顔を見たときは、自分が準備してきたものと、最後まで諦めなかったこととかをひっくり返して、報われたなという思いがします。

それに、全国民の朝がかかっていると思うと、こちらでも生半可な気持ちではやれないです（笑）。視聴者の皆さんが今日1日頑張るぞと、奮い立つような作品になれば幸せです。

——『虎に翼』を見て法曹になりたいと思う若者が出てくれたら、我々も嬉しいです。

本当にそうですね。ドラマの影響を受けて法曹の世界や映像の世界に興味を持ってくれたら、嬉しいですよ。

—— 滝藤さんは、いつもとても印象に残る役をやられているので、影響される方が多いそうですね。ドラマの今後の展開、楽しみにしています。最後に、滝藤さんのその抜群のセンスはどのように磨かれてきたのかお聞きしたいです。

僕はセンスがないと思うんですけど（笑）。そこが滝藤の良さというか。滝藤が滝藤である所以といえますか。誰も言ってくれないから自分で言っちゃいましたけど（笑）。でも失敗することじゃないですかね。失敗して自分に合うものを見つけていくという。だから僕も数々の失敗をしていますよ。

プロフィール たきとう・けんいち

1976年愛知県生まれ。1998～2007年無名塾在籍。2008年公開「クライマーズ・ハイ」で脚光を浴び、以降、実力派の名俳優として映画やドラマ、CMに多数出演。主な出演作品にテレビドラマ「外事警察」「半沢直樹」「俺のダンディズム」（主演）、「コタキ兄弟と四苦八苦」（同）、「コード・ブルー」、映画「ゴールデン・スランバー」「踊る大捜査線」「ミステリと言う勿れ」。2024年度前期連続テレビ小説『虎に翼』（NHK）では主人公・寅子の上司で家庭裁判所の設立に向け邁進する多岐川幸四郎役を演じている。